

「神戸マラソン将来構想」に係る提言



令和6年1月

神戸マラソン将来構想検討委員会

「神戸マラソン将来構想」に係る提言

1 はじめに

神戸マラソンは、神戸全日本女子 20 km ロードレース・神戸全日本女子ハーフマラソン (1981 年～2010 年) から発展させる形で、空前のランニングブームの中、2011 (平成 23) 年にスタートし、2022 (令和 4) 年に第 10 回大会を迎えた。

この間、全国各地で都市型、地方型市民マラソン大会が次々に開催され、ブームを象徴しているような状況であった。しかしながら、ランナー人口の高齢化、令和 2 年から大流行した新型コロナウイルス感染症による大会の中止、警備費高騰の影響による参加費の大幅な値上げなどにより申込者数が減少するなど、マラソン大会を取り巻く環境が大きく変化してきた。現在、定員に満たずに開催する大会、規模を小さくする大会、また開催そのものをやめる大会もでてきている。一方で、神戸マラソンは 60 万人を超える沿道応援や企業や地域団体からの多くの支援により、ランナーには魅力ある大会として高い支持を得ている。

このような中、県民・市民のスポーツの振興を図るとともに国内外への震災復興の支援に対する感謝と兵庫・神戸の魅力の発信に寄与してきた「神戸マラソン」のこれまでの成果を検証し、特色ある都市型市民マラソンとして魅力を高め、持続可能な大会とするための方策を策定することを目標として、「神戸マラソン将来構想検討委員会」(以下、「委員会」と表記) が設置された。

委員会ではまず、神戸マラソンが中期計画として設定した第 10 回大会までに達成すべき 10 の目標について、以下のとおり検証・評価を行った。

【1. 競技性の向上】

シード枠の導入や連続入賞者表彰制度の創設、また海外や国内のエリートランナー招聘を積極的に行ったことにより、大会記録の更新には繋がった。一方で、日本トップレベルの記録には達しておらず、更なる競技性向上の可能性を追求するべきである。

【2. 大会の質と国際的認知度の向上】

世界陸連ラベルレースとして大会を実施したが、国際的認知度の向上とまではいかず海外ランナーの参加者数は伸び悩んだ。

【3. 多様なランナーニーズ (従来のクォーターマラソンを含む) への配慮】

初出場枠の継続やマラソン初心者向け・女性向けのランニング講座を充実させることにより、多様なランナーの参加促進策を実施したが、競技種目はフルマラソン 1 種目であることから、効果は限定的であった。

【4. より安全で快適、記録が出る神戸らしいコースの設定】

ウェーブスタートを導入したことにより安全で走りやすい大会を実施できたが、一方で浜手バイパスから神戸大橋に向かう約 38 km 地点で 20m を超える高低差があり、コースの設定について、改善する必要がある。

【5. 大会と兵庫・神戸の街の魅力やブランドの向上】

ファッション、グルメ&スイーツ、インターナショナル、ジャズに関する企画を行いランナーや応援する人から一定の評価を得ているが、街の魅力やブランド力の向上に関しては、質的・量的に課題がある。

【6. マラソン大会へ向けた街の賑わいの創出、地域の活性化】

これまで他イベントとの連携による機運の盛り上げ、観光モデルプランの紹介などにより街の賑わいの創出に取り組んだが、県内全域の賑わいにまで波及しているとは言い難い。今後は、さらに県内各地の観光振興につなげていくことが望まれる。

【7. 県民・市民（特に若者）の大会参画意識の向上と観戦・応援を通じた感動体験の共有】

スタートセレモニーにおいて「しあわせ運べるように」を合唱するなど具体的アクションを通じて、大会テーマ「感謝と友情」の意義を参加者全体で共有した。また、ひまわり応援企画などの親しみのある企画、ランナー・応援者に対するアンケートの実施、ファンクラブの実施検討など、参画意識向上を目指す取り組みを行った。

【8. インバウンド促進とスポーツツーリズムによる国際交流の推進】

KOBE PR アンバサダーによる出走及びSNSでの情報発信により、神戸マラソンの広報を行い、知名度は一定程度向上していると考えられるが、海外ランナーの参加者増加にまでは繋がっていない。

【9. フレンドシップバンクを通じた寄付文化の醸成】

東日本大震災以外の国内外で発生した災害に対しても、幅広く支援を実施してきたことにより、実績は積み上がってきたが、寄付先の選定が災害の発生状況によって左右される。今後は時期や実施方法も含め検討する必要がある。

【10. 国際的スポーツイベントでも活躍できるボランティアの育成】

神戸マラソンを通じてボランティアリーダーを養成し、ラグビーワールドカップなど他の大会にも参加した。今後も様々な国際スポーツイベントで活躍できるボランティアを確保・養成し、活躍の場を拡大することが求められる。

神戸マラソンは、世界陸連ロードレース格付け取得や国内外の有力選手の招聘により競技力の向上を図りながら、一部コース変更の実施やウェーブスタートの採用、制限時間7時間を維持することで完走率は95%を超えるなど、フルマラソン初心者でも安心して参加できる大会として定着してきた。

また、沿道においては沿道応援者が60万人を超えるなど、「途切れない応援」が大会の特徴の1つとなっている。そして、多くのボランティアに支えられ大会テーマ「感謝と友情」を国内外に広く発信してきた。

今後は、①記録向上・安全性と都市の魅力発信を両立したコース設定、②エリート選手参加などによる競技性の向上、③海外誘客や地元商店街と連携した賑わいづくり、④沿道地域住民、事業者への配慮、⑤既存のコースを最大限に活かし、調整コスト・時間を削減、⑥持続的な運営体制・財的基盤の確立といった課題については、具体的な対応策が必要となる。

これらの課題に対応するための具体的方策及び大会テーマについてまとめた。

2 提言内容

(1) 課題に対応するための具体的方策

平成 28 年に「これからの神戸マラソンの在り方検討委員会」から提出された「これからの神戸マラソンの在り方」に係る提言において、今後の神戸マラソンが達成すべき目標について多数の提言があった。それを受け設定した 10 の目標については検証のとおり実施できたものと実施できていないものがあるが、これらの目標は基本的に今後も継続しつつ、神戸マラソンの抱える課題の解決に向けて、以下の項目を重点的に実施するべきである。

【1. フィニッシュ場所の変更】

フィニッシュ地点を、神戸ポートタワーを眺望でき、三宮駅や元町駅、神戸駅付近の繁華街が近いウォーターフロントエリアに変更することにより、ランナーや沿道応援者などによる賑わいの創出や経済効果の大幅な増加をねらう。例えば、再開発が進む神戸のウォーターフロント周辺の施設、港町神戸の特徴である船舶や航路を活用した応援イベントなど、多彩なイベントを開催することで、神戸マラソンを盛り上げると同時に周囲の賑わいづくりをすすめることができる。

賑わいづくりに係る費用を確保するために、新たな協賛社の獲得や他イベントとの連携・協働を推進する必要がある。

【2. 魅力と競技性を高める新たなコース設定】

明石市域までコースを延伸し、海外にも知名度の高い明石海峡大橋の眺望を最大限に活かしたコース設定にすることで、海外ランナーの誘客を促進し、インバウンド消費による地域経済の活性化をねらうとともに、これまで親しまれてきたコースの大部分を活かしつつ、より魅力を高めることができる。

加えて競技の面では、浜手バイパスから神戸大橋を経由しポートアイランドに向かうコースを回避できることから、①ランナーにとって大きな障壁となっているコース終盤における高低差の解消、②神戸大橋上における向かい風を受けやすい状況の解消、③窮屈な折り返し地点の改善が見込まれる。この結果、ランナーの負担を大きく軽減し、かつユニバーサルデザインに配慮したコースとなり、ペースを落とすことなくレースを進めることが可能となる。

新たなコース設定は、現コースを走ったトップランナーの実績を元に推定すると、約 50～60 秒以上のタイム短縮が見込まれ、国内屈指の高速コースの実現が可能となる。

【3. 「車いすやファンラン、ファミリーラン」など多様な種目設定】

神戸大橋を経由しないフラットなコース設定により、車いす種目を開催することが可能になる。兵庫・神戸は、「障害者スポーツネットひょうご」や「フェスピック神戸大会 1989」（現、アジアパラ競技大会）、「KOBE2024 世界パラ陸上競技選手権大会」の開催など、パラスポーツの全国の先進地である。車いす種目の開催により、兵庫・神戸におけるパラスポーツのランドマークになる可能性がある。また、子どもや青年層のパラスポ

ーツへの新たな関心が高まり、多様性の受容の推進につながると考えられる。

ファミリーランやファンランなどを設定することは、子どもや青年層を含めた多くの世代がマラソンに親しむ機会につながり、新たな神戸マラソンファンの獲得やマラソン文化の醸成にもつながる。

【4. 海外ランナー誘客の促進によるインバウンド対策】

神戸マラソンのブランド力をより高め、大会の魅力を上昇させるためには海外誘客の更なる推進が必要である。今後は、神戸マラソン海外在住者参加促進検討チームが取りまとめた「神戸マラソンの海外ランナー増加に向けた取り組み」を踏まえて、海外ランナーの誘客を促進する。海外ランナーに向けた効果的な情報発信を行うとともに、兵庫・神戸の特色を活かし、多言語案内、地域名産の給食、また、JAZZ、和太鼓、ストリートピアノなどの音楽による沿道の応援の充実のほか、神戸市内に限らず兵庫県全域でのツーリズムの促進・充実を図るなど、神戸マラソンの体験の魅力を高める取り組みをさらに進めていく必要がある。

【5. 神戸マラソンのブランド化の推進による持続可能な大会運営】

これらの方策を実現するためには、準備に向けた費用が発生し、加えて実現後の運営費用の大幅な増加が想定される。持続可能な大会にしていくためにも、神戸マラソンの魅力を高め、ランナーに選ばれる大会としてブランド化を推進することで更なる協賛金の獲得を目指すなど、安定的な財源の確保に取り組む必要がある。そのためには、神戸マラソンを印象づけるロゴやテーマ曲を活用していくとともに、兵庫・神戸の観光、グルメ、イベントやこれまで培ったフレンドシップバンクによる寄付文化の発信といった取り組みを推進していく必要がある。また、日本のマラソン発祥の地であることに関連したイベントの実施などにより、兵庫・神戸の歴史・文化を発信することも可能となり、同時にランナーにとっても魅力的な大会を実現することに寄与する。

なお、開催時期については、気候や他大会の状況などを考慮するなど、ランナーがより参加しやすい時期を検討していくべきである。

(2) 大会テーマの更なる浸透

現在の大会テーマ「感謝と友情」は、阪神・淡路大震災以降、兵庫・神戸に手を差し伸べていただいた国内外の人々への感謝の気持ちの表明と、来訪する全ての人々が仲間であるという考えに基づき決定され、神戸マラソンは震災復興のシンボルとして始められたという開催経緯がある。このテーマは、普遍的で大会開催意義の根幹であり、今後もこの考えは維持し、継続していくべきである。ただ、震災 30 年を迎える中で、震災からの復興を遂げた姿を発信することで感謝を伝えることに加え、そこから生まれた友情をより浸透させていくべきである。

具体的には、現在そして未来に向けて、地震や自然災害への支援だけでなく、そこから波及した支援を必要とする領域に発展させていくことも含め検討するなど、現行の神戸マラソンフレンドシップバンクの運用を見直し、ランナーからの寄付金だけに留まらず、寄付金の公募やその活用時期も含め新たな仕組みを創設し、支援を拡大していくことにより大会テーマの具現化さらには大会の開催意義を強く伝えていく必要がある。また、持続可能な支援の実現に向け、新たな原資の確保も含めた運営体制の確立により、将来に渡って

支援を継続していくことを目指すべきである。これらは神戸マラソンに関わる人々の寄付文化醸成に寄与するものと考えられる。

3 おわりに

委員会では、中期計画の実施状況について評価と検証を行い、課題に対する具体的方策について示した。対応が可能なものについては、速やかに取り組むべきである。

大会の開催運営体制は、過去 10 回の大会を経験し成熟しているが、時代の変化に対応する柔軟性や財源の確保も含めた持続可能な運営体制の確立などが不可欠となる。この間、2020（令和 2）年に神戸市においては文化スポーツ局、2023（令和 5）年に兵庫県においても県民生活部へスポーツ担当部門が編成され、県市ともにスポーツを活かしたまちづくりの強化が推進されている。

今後、神戸マラソンは、魅力的なコース設定とホスピタリティの質のさらなる向上とともに、大会の認知度を国内外で高める必要がある。さらに、大阪・関西万博の開催や神戸空港の国際化の機会を積極的に活用することにより、国内外から多様なランナーが参加し、兵庫・神戸のスポーツ振興や経済活性化に貢献するイベントとして、成長発展することが期待される。

また、震災でお世話になった国内外の人々に「感謝と友情」の気持ちを示すという神戸マラソンの基本理念をベースにし、大会を通して国内外の人々との交流を発展的に継承することが望ましい。

そのためには、引き続き、兵庫県、神戸市、（一財）兵庫陸上競技協会の三者が一丸となった組織体制で、相互に連携・補完しあいながら、世界に通用する神戸マラソンとして充実を図るべきである。

【参考資料】

○ 審議経過

回数・開催日時	審議内容
第 1 回 令和 5 年 3 月 3 日	・神戸マラソンの現状
第 2 回 令和 5 年 6 月 30 日	・中期計画の評価と検証、今後の方向性について
第 3 回 令和 5 年 8 月 23 日	・課題解決に向けた具体的な方策
第 4 回 令和 5 年 10 月 6 日	・全体の将来構想提言案の提示
第 5 回 令和 5 年 12 月 18 日	・神戸マラソン将来構想最終提言とりまとめ

○ 神戸マラソン将来構想検討委員会委員

	分野	所属・職名	氏名
1	スポーツ科学 (委員長)	神戸大学 名誉教授	山口 泰雄
2	競技力向上	一般財団法人兵庫陸上競技協会 専務理事	宮永 正俊
3	競技力向上	神戸市陸上競技協会 理事長	西角 智成
4	競技・市民参加	神戸学院大学共通教育センター 准教授	上谷 聡子
5	協賛 (プロモーション他)	アシックスジャパン株式会社 取締役 カテゴリー統括部長	井上 太郎
6	経済活性化	神戸商工会議所 総務部 主任調査役	三宅 雅也
7	まちの賑わい創出	大阪成蹊大学経営学部 教授	田村 匡
8	観光・海外誘客	公益社団法人ひょうご観光本部 専務理事 (令和5年6月20日から)	佐伯 公宏
9	観光・海外誘客	一般財団法人神戸観光局 専務理事	中西 理香子
10	経営・運営	有限会社神戸経営支援センター 代表取締役 ／ 兵庫県立大学大学院 特任教授	藤本 秀俊
11	報道	株式会社朝日新聞社 神戸総局長 (令和5年6月20日から)	山崎 直純
12	報道	株式会社神戸新聞社 事業局長	豊川 聡
13	行政 (スポーツ振興)	兵庫県県民生活部 スポーツ振興課 スポーツ推進調整官 (令和5年4月1日から)	織邊 剛
14	行政 (スポーツ振興)	神戸市文化スポーツ局 スポーツ企画課長	山本 亮子

- ・松浦 幸浩 前公益社団法人ひょうご観光本部 専務理事 (令和5年6月19日まで)
- ・堀江 泰史 前株式会社朝日新聞社 神戸総局長 (令和5年6月19日まで)
- ・田中 正晴 前兵庫県教育委員会事務局 スポーツ振興課長 (令和5年3月31日まで)